



TITLE:

# 超高齢社会における要介護高齢者 家族支援に関する研究—家族介護 者の体験の記述とケア共同体構築 の試み—( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

真継, 和子

---

CITATION:

真継, 和子. 超高齢社会における要介護高齢者家族支援に関する研究—家族介護者の体験の記述とケア共同体構築の試み—. 京都大学, 2015, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2015-11-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r12975>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

( 続紙 1 )

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	真継 和子
論文題目	超高齢社会における要介護高齢者家族支援に関する研究 －家族介護者の体験の記述とケア共同体構築の試み－		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、1）長期在宅介護を続ける家族介護者の生きられた経験を記述し、介護の場におけるケアの様相を明らかにするとともに、2）超高齢社会における新しいケアシステムを提案するためのコミュニティづくりの試みからケア共同体の意義と生成可能性を検討することで、ケアの再考と家族介護者支援の探求を行ったものである。</p> <p>第1章では、問題意識の確認と先行研究の検討から課題の設定が行われた。現代社会における家族介護の限界を踏まえ、専門職の視点での支援から家族介護者の視点に立った支援、さらに専門職による個人的アプローチから住民が支え合うコミュニティづくりが必要であることが指摘された。</p> <p>第2章では、2つの研究デザインについて検討がなされた。まず家族介護者の経験の具体性と多様性を明らかにするための方法として、現象に向かう研究者の態度を重視した現象学的アプローチの必要性が述べられた。次にケア共同体の構築に向けてアクションリサーチを採用することにより、人々の生活の文脈に沿った方策を検討できることが指摘された。</p> <p>第3章では、5名の家族介護者への聴き取りを中心にかれらの生きられた経験が記述され、要介護者と介護者の二者関係におけるケアの様相が考察された。二者関係における宿命的な限界（閉塞状況）を突破するために、かれらによって「重荷のかいならし」が実践されていたことを指摘した。それは介護技術の身体化、身体を介した要介護者との共有感覚の感受、重要他者との人格的つながり、援助行為以外の生の充実を通した「経験にもとづく学習を通した自己可能性の発見」と「療養者とともに生き抜くしなやかな強さの獲得」から成り立つことが明らかにされた。</p> <p>第4章では、著者自らが試みた小地域基盤型ケアコミュニティ「あいあいサロン」の2年半の活動展開が述べられた。この試みで明らかにされたことは、参加者が時間と場を共有することは個人の健康問題の解決のみにとどまらず、サロンがコミュニティ・エンパワメントにより住民同士の支え合いの場として機能し、人々のQOL向上の一助となるということであった。</p> <p>第5章では、「あいあいサロン」における参加者の相互作用に着目し、人々の関係性や行動の変容についての考察、ケア共同体の可能性についての検討が行われた。サロンでは参加者のコミュニケーションネットワークが活性化され、参加者同士の相互作用の展開により個人レベル、サロンレベル、生活圏レベルへと、個人の自己可能性が拡大された。また支援される者から支援する者への成長、そして支援し合う者への成長があったことも指摘された。それは他者からの温かいまなざし、適度な心理的距離、状況依存的な役割関係、エンパワーされるような互報性をもと</p>			

に、葛藤の創出と葛藤からの合意形成を経て個人の主体性が際立っていった結果であることが論じられた。

第6章では、第3章から第5章までで得られた知見から、ケアをめぐる総合的考察が行われた。ケアとは文脈依存的であり、肯定的側面と否定的側面といった両義性を持っていること、ケアは介護者との状況との関係性の中で成り立ち、＜関係性＞のなかで介護の意味付与がなされること、ケアは介護者の＜志向性＞によってさまざまな位相に分かれていること、介護の意味は＜時間性＞のなかで繰り返し捉え直されるとともに、今のありようは未来における意味可能性を秘めていること、等が論じられた。これらを踏まえ、介護者と要介護者が閉塞した二者関係に陥ることを防ぐ方策として、共同体を形成し物語の共有と意味づけを行う、語りあい制度の構築の必要性が指摘された。

第7章では、結論として以下の諸点が論じられた。1) 家族介護者の経験は、学習を通じた自己可能性の発見と療養者とともに生き抜くしなやかさの獲得を持ち合わせた「重荷のかいならし」であること。2) 介護では未来への意味志向よりむしろ内省により、確かな意味生成がなされること。3) 語りあいは情緒的一体性から新しい価値への気づき、人生の意味の発見を可能にすること。4) 介護者家族への支援として①ナラティブアプローチによる体験の捉え直し、②ケア以外に没頭できる対象の存在、③実現可能性のある目標設定、④ネットワーク創出と緩やかなつながりの形成、⑤葛藤の創出と葛藤からの合意形成の促進が必要であること。5) 看護者は介護者の視点を多視的・多義的なもの（こと）へ誘い、彼ら自身の生活や人生が充実することを保障することが必要であること。

最後に補章で、著者の専門領域である在宅看護学、家族看護学における研究への理論的貢献を果たすため、看護研究と現象学について検討がなされた。本論文では現象学的アプローチをとることにより、時間の経過と関係性の構築に比例して個々人の人生の意味が生成してくる様が見てとれた。生活世界の可視化と不可視化の交錯する中で、ケアの場面は生活世界の自明性が裂け目を見せるとともに、再度安定化し自明性を取り戻す特異な場面であり、現象学の方法が生きると同時に現象学を深化させる可能性を秘めていることが指摘された。

(論文審査の結果の要旨)

現代の日本社会では、医療水準の向上、疾病構造の変化、人口構成の変容など複合的な要因によって、要介護者の数が急増している。公的な支援制度の整備は追いつかず、多くの場合介護の負担は家族に大きくのしかかっているのが現状である。しかしながら家族介護者という当事者の視点から、その実相を深く記述し分析する研究はいまだ十分に行われていない。本学位申請論文はこうした背景を踏まえ、第一に、長期在宅介護を続ける家族介護者の生きられた経験を現象学的アプローチに基づき記述し、介護の場におけるケアの様相を質的研究法によって明らかにした。第二に、超高齢社会における家族介護の限界をのりこえるケアのあり方を提案するため、アクションリサーチの方法によって住民同士の支え合いによるコミュニティづくりを実践的に行い、ケア共同体の生成可能性を模索した。そして最終的には、これらの探究をつうじて得られた、介護者の「重荷のかいならし」の術策や自己肯定感の獲得、しなやかな強さの獲得に関する知見、さらには介護者どうしの「語り合い」の場がもたらす力に関する洞察を手がかりに、在宅看護学の領域に新局面を切り拓くことが目指された。人文・社会諸科学の理論と看護学研究との架橋をはかった本論文は、以下に述べる点において画期的な意義をもつものと考えられる。

本論文最大のハイライトは、5人のインフォーマントからのインタビュー・データをもとにした、現象学的アプローチによる家族介護者の生きられた経験の解明の部分(第3章)である。現象学的アプローチの本質は、「事象そのもの」に立ち返ることにある。今日、家族介護者たちに対するまなざしは、たとえその立場に同情・共感的なものであっても、現象学がいうところの「自然的態度」にとらわれ、その生きられているありのままの姿をとらえていない。それに対して本論文において家族介護者に対してとられたアプローチは、「現象学的還元」の発想をヒントに、事象そのものを覆い隠す日常的価値や先入見を排し、インフォーマントによって語られた介護者の世界を、できる限りそのままの姿で捉え、理解しようとするものであった。インタビューの解読作業もさることながら、まず申請者によってなされたインタビューそのものが、この現象学的姿勢にかなったものである点も特筆される。調査協力者との間で信頼関係作りを丁寧におこない、時間をかけながら語り手と共同作業で語りを紡ぎ出していくさまは、インタビュー・データとして論文中に提示された、調査者と語り手との会話体からも読み取れる。そして分析においては、語られた言葉を通じて、介護という経験の立ちあらわれが、介護者たちの内的世界とともに見事にすくい上げられている。その解読作業は語られた世界から決して乖離せず、データに密着して行われているため、十分な説得力を備えたものであった。

本論文が有する第二の意義は、申請者自身が中心となってケアコミュニティ「あいあいサロン」を立ち上げ、そこを足場にアクションリサーチを行うことを通じて、地域における新たな支え合いの体制を提案するとともにケア共同体の可能性について洞察した点である。このケアコミュニティは、家族介護者のみならず広く在宅患者・療養者や医療・介護に関心を持つ一般市民までを対象とした開かれたものであった。それは、はじめ自分への個人的関心のレベルにとどまっていた参加者が、やがてサロンレベルでの集団的関心に関かれ始め、最終的には参加者が援助主体となってそれぞれの生活圏において行動変容を起こしていくという三段階の変化を目論んだものであった。このように周到にデザインされた実験的ケアコミュニティにおいて、参加者の関係がどのように変容し、主体的変化が生じていったかが、健康記録やサロンにおける参加者の談話といった一次資料の分析(第4章)、そしてある参加者とスタッフとの

かかわりの時系列的解釈やサロンで交わされる参加者どうしの会話データの解説（第5章）を通じて明らかにされた。おそらくこのような資料自体が、アクションリサーチという研究形態をとらなければまず入手不可能なものである。研究目的と方法論とが高次元で整合している点で、極めて高く評価できる。また資料から引き出された洞察も、従来の凝集性の高い地域共同体と区別される、ケア共同体に固有の本質を浮き彫りにする極めて興味深いものであった。

最後に三点目として、本論文の理論的貢献、とりわけ看護学分野におけるケア概念に対するインパクトが挙げられる。従来の研究におけるケア概念はたぶんに倫理的・規範的意味合いを帯び、「よきもの」であることの自明性が疑われなかった。しかし申請者は「事象そのものへ」を合言葉とする現象学的アプローチを採用することで、それが配慮と重荷、喜びと苦悩のバランスの上に成立する営みであること、また「関係性」のなかで意味付与がなされることなど、従来看過されていた重要な論点をそこに付け加えた。また介護者の経験世界の分析から、ケアする者—される者の二者関係にひそむ隘路と第三者の存在の重要性を提起したことも重要な貢献である。

本論文はこのように極めて優れたものであるが、課題がないわけではない。たとえば、論文前半部で取り上げられた要介護者が、非常に症状が重篤で外出も不可能であるのに対し、後半のあいあいサロンの参加者は比較的行動の自由がきくという重要な差異があるにもかかわらず、前半と後半の議論を無媒介に接続しようとするきらいがある点には問題がある。また研究方法論に関する記述が不明確である点や、インタビューの語りの扱い方に、申請者の言う現象学的立場と一部齟齬を来す部分もある点が指摘された。しかしこうした問題点は、論文全体のもつ意義や学術的貢献に比べれば相対的に軽微で、価値を大きく損なうものではない。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年9月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：                      年                      月                      日以降